View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

兵庫県立大学環境人間学部　研究報告第 16 号（2014 年）

大学の地域貢献活動の教育効果に関する考察
—Enactus の事例をもとに—

豊田　光世*、内平　隆之**、井関　崇博**、中嶌　一憲**
*人間環境部門、**社会環境部門

Educational Effects of the Enactus Competition of University Community Projects

Mitsuyo TOYODA, Takayuki UCHIHIRA, Takahiro ISEKI, Kazunori NAKAJIMA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: The advancement of community services is one of the most important missions of universities today. In addition to the pursuit of educational and academic achievements, universities need to strengthen their relationship with local agencies (e.g. governmental organization, NPOs, private companies and shop owners) and to consider possible solutions to social issues in collaboration with them. The University of Hyogo School of Human Science and Environment has been expanding community service projects since the establishment of Eco-Human Community Cooperation Center in March 2011. One of the unique trials of this Center is its participation in Enactus, a worldwide organization aimed at supporting entrepreneurial community projects conducted by university students. At Enactus competitions, students from various universities present their activities and exchange ideas for improving their community projects from economic, social and environmental perspectives. This paper explains the ideas and rationale behind the Enactus competition and examines its educational effects on the basis of the interviews with students who participated in this competition.

Keywords: university-community partnerships, community projects, empowerment, Enactus

１．はじめに

21 世紀に入り、大学の役割が大きく変化しようとしている。「地域」をキーワードに、新たな目標や機能を拡充していくことが強く求められるようになった。研究成果を生かして、あるいは大学生の教育活動を通して、どのように地域社会に貢献していくかを考えることが、大学運営の重要な課題となっている。

兵庫県立大学環境人間学部では、2011 年に「エコ・ヒューマン地域連携センター（以下「EHC」とする）」を開設し、大学生による地域貢献活動の推進に積極的に取り組んできた。プロジェクトに参加している学生は、2013 年 8 月末の時点で 200 名を越えており、全学生の約 25% を占めることからも、地域貢献が環境人間学部の特色の一つとなっていることが分かる。EHC は、学際的な学部の特徴を生かして、環境、教育、福祉、まちづくりなどにかかわる多彩なプロジェクトを展開している。EHC の運営にかかわる教職員は、活動を推進する際に必要となるプロジェクトマネジメント力を高めるためのマンスリーワークショップを開催するなど、学生プロジェクトのサポートを企画してきた。その中で、学生たちの社会参画へのモチベーションを高め、活動の質的向上を図るためには、学外との交流を活発化し、情報発信や意見交換の機会を増やしていくことが重要との認識に至った。このような認識のもと、EHC は、2012 年度より Enactus と

いう非営利組織が主催する大学生の地域貢献活動コンテストに参加している。

本論文では、大学生の地域貢献を支援する Enactus というしくみについて、その概要を報告するとともに、コンテストに参加した学生への聞き取り調査を通して、Enactus への参加がどのような教育効果をもつかについて考察する。

２．地域貢献という大学の使命

いつから「地域貢献」が大学の重要な課題として位置づけられるようになったのだろうか。一つの大きなきっかけとなったのは、「社会貢献」を大学の責務として明示した中央教育審議会の答申である。2005 年にこの審議会が示した「我が国の高等教育の将来像」では、教育、研究と並んで、社会貢献が大学の「第三の使命」として位置づけられた。長期的な視点で考えると、教育と研究も社会貢献につながりうるのだが、実社会の問題解決や発展に対してより直接的な貢献を行うことが、大学に求められるようになったのである。このような考え方にもとづき、学校教育法（2006 年改正）や教育基本法（2007 年改正）においても、教育研究の成果を広く社会に提供し、社会の発展に寄与することが、大学の目的として明記されるようになった。

「地域貢献」は、上述した中央教育審議会の答申のなかで、産学官連携、国際交流と並ぶ社会貢献の一つの機能として掲げられているにすぎなかった。しかしながら、その後、大学における地域貢献が大きく変化していく。文部科学省が 2013 年度に本格的な実施を開始した「地（知）の拠点整備事業」では、大学の COC(Center of Community)機能の強化が目標とされている。大学を地域再生の中核として位置づけて、地域の課題（ニーズ）と

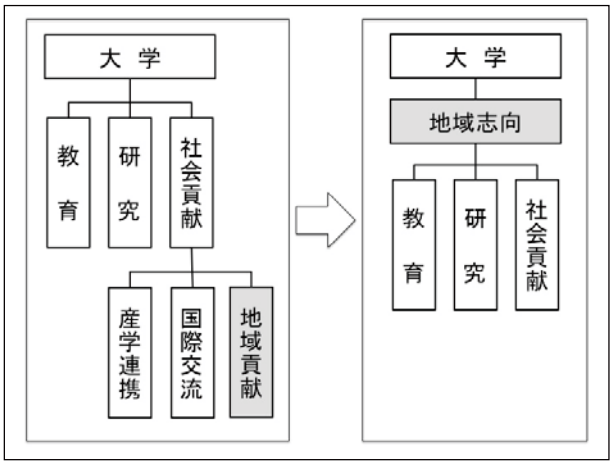

図１：大学における地域の位置づけの変化

大学の資源（シーズ）のマッチングにより、課題改善・解決に向けた活動を全学的に進めていこうという試みである。この事業では、「地域貢献」を単なる社会貢献の一形態ではなく、大学の教育、研究、社会貢献の方向性を定める際の基本方針として位置づけている。事業に参加する大学は、全学的に地域志向の教育カリキュラムや研究体制を支援することを求められる。2005 年の中央教育審議会の答申と 2013 年の COC 事業の方針を比較してみると、地域貢献の位置づけが大きく変化していることが分かる（図 1）[1]。

大学に対して地域貢献という機能の強化が求められているのは、我が国に限ったことではない。例えば、1990 年頃から university-community partnerships に関する議論が盛んになっている。大学は、地域、あるいは社会そのものから隔離された環境を自ら構築してきたのではないだろうか。雑多な社会から切り離すことで、普遍性・非日常性を尊重する空間を作り上げ、学術知の生産に邁進してきた。こうした大学の姿は、「象牙の塔」「タウン＆ガウン」などの言葉によって象徴される[2]。しかしながら、これらの言葉が示唆する 1980 年後半までの大学のあり方を見直すことが、国外でも大きな課題として認識されているのである。

では、なぜ地域貢献という機能を拡充させることが大学に求められているのだろうか。COC 事業推進の理由として、大学に対する次のような批判が示されている。

① 大学の教育研究が社会の課題解決に応えていない。
② 学生が大学で学んだことが社会に出てから役立っていない。
③ 大学が組織として地域との連携に臨んでいない。

このような批判を踏まえると、大学は、「研究」「教育」「社会貢献」という 3 つのミッションの全てにおいて、方針の再検討を迫られている。

地域参加型のナレッジコモンズについて研究を行う Peter Levin は、大学も地域コミュニティーのメンバーの一員、すなわち「市民」としての責務があると述べる[3]。過去に蓄積してきた知識や技術を生かして、よりよい地域づくりに貢献していくことが、大学というアクターの果たすべき使命として認識されてきた。

さらに、Martin *et al.* は、社会問題に取り組む際のパラダイムが「ガバメント」から「ガバナンス」へとシフトしていることも、大学の役割の変化に関係していると指摘する[4]。複雑な地域の課題に対して的確な対策を講じていくためには、行政機関などがトップダウンで方針を決めるのではなく、さまざまな主体の連携により多角的視点から課題にアプローチすることが重要である。ガバ

ナンスは、地域諸主体の連携による統治を表すコンセプトとして、議論されている。このような背景のもと、大学も地域ガバナンスにおいて自らの役割を追究していくことを求められている。

大学が地域社会に貢献していく形はさまざまである。①地域課題を解決するために専門知識・技術を生かすことや②ボランティア活動などを通して若いマンパワーを提供することだけではなく、③地域のパートナーとして課題解決のアイディアを共に考えたり、プロジェクトを推進したりという貢献もある。EHC では、特に③の貢献の形を重視しながら、地域連携を進めてきた。その際、課題解決に実質的な成果を生み出すことができるかということだけでなく、地域貢献のプロセスに教育的意義を生み出すことができるかが、教育機関でもある大学としての重要なチャレンジである。地域貢献活動に参加することで、学生がスキルアップできるような工夫が必要となる。例えば、地域貢献は、経済産業省が示す「社会人基礎力」を向上するための具体的方法としても着目される。社会人基礎力とは、①前に踏み出す力(アクション)、②考え抜く力（シンキング)、③チームで働く力（チームワーク）という３つの能力を指す[5]。課題を発見しながら、その解決に向けた実践を生み出すための力であり、このような力は地域貢献の現場においても不可欠な能力なのである。

地域貢献と教育の双方を充実させていくことが、大学の大きな目標であるが、次章で述べる Enactus は、そのための一つのモデルとして発展している。

３．Enactus の理念とアプローチ

３－１　Enactus の概要

大学生の地域貢献活動を活性化するための国際的なしくみに、Enactus という NPO がある[6]。Enactus という名前は、entrepreneurial、action、us という３つの言葉に由来し、コミュニティーの課題解決に向けて創造的なアイディアを生み出し、活動につなげていくことの大切さを象徴している。Enactus の主要事業は、さまざまな国の大学生が一堂に会し地域貢献活動の質を競うワールドカップの開催である。年に一度、参加国から会場を選び、優れた活動を共有する場を提供している。参加する学生たちは、具体的な地域課題・社会問題を解決していくためのプロジェクトを企画・実行し、その成果を発表する。教育的観点から考えた時に重要となるのは、成果そのものだけではなく、プロジェクトを進めていく過程においてどのような能力を伸ばすことができるかということである。そのために、それぞれの学生グループには、ファカルティーアドバイザー（FA）がつくことになっている。FA は、学生の地域貢献活動がコミュニケーション能力、リーダーシップ、プロジェクトマネジメント力などの向上や、地域の多様なステークホルダーとの人的ネットワークの構築につながるよう、学生たちの活動をサポートする。

Enactus ワールドカップに出場するためには、各国の国内大会で最も優れた評価を得なければならない。日本では 2005 年から毎年国内大会が開催されてきた。2012 年度は 9 校、2013 年度は 17 校が国内大会に参加している。国内大会のプレゼンテーションは日本語で行われるが、代表校として選ばれた大学は、ワールドカップにおいて英語で活動を発表する権利を獲得する。ローカルな活動をグローバルな舞台で PR し、ビジネスや教育のエキスパートから貴重なフィードバックを得ることができる。

３－２　地域貢献活動の評価基準

Enactus が重視しているのは、その名前にもある通り「アントレプレナーシップ」を生かして地域の課題解決に取り組むことである。アントレプレナーの語源は、「始める」「企てる」などを意味する entreprendre というフランス語にある[7]。日本語では、「起業家的精神」と訳されることが多く、新しいアイディアを生み出すクリエイティビティーを備えたビジネスセンス・能力を表す。ただし、Enactus ワールドカップが目指すのは、新たなマーケットや収益を生み出し規模を拡大していくためのビジネスアイディアコンペではない。この大会の重要な評価軸は「エンパワーメント」である。すなわち、地域で生じているさまざまな課題について、クリエイティブな視点からその解決策を探り、持続可能なアクションへとつなげることができているかが問われる。

創設者であり Enactus Worldwide の President 兼 CEO を務める Alvin Rohrs 氏は、Enactus に参加する大学生に向けて次のようなメッセージを伝えている。

> Enactus のメンバーとして、わたしたちが信じているのは、それぞれに内在するアントレプレナーとしての精神を引き出して、知恵と情熱とアイディアをつなぎながらよりよい社会の実現を目指すことこそが、人間の進歩だということである。・・・わたしたちのアプローチの核となるのは、エンパワーメントである。・・・アクションを起こすことで、相手がもつアントレプレナーの精神を引き出すことだ。課題をもつ人びとに救いの手を差し伸べるのではなく、課題解決に向けて新たな機会を創出するための方法を共に考えていこう。そうすることで、あ

なたが関わった全ての人、そして地域コミュニティーが、自らの最大限の可能性を生かして行動していくことにつながる[8]。

エンパワーメントというコンセプトが示唆するのは、活動が大学生の若いマンパワーを生かした奉仕や援助で終わってはならないということである。アクションが持続可能な変化をもたらすためには、自分たちの働きかけが地域の自活につながる必要がある。必要な知識やスキルを共有したり、協働でプロジェクトを進めたりすることで、課題をもつ人びとが行動を起こすきっかけを作っていくことが重要なのである。

さらに、Enactusの地域貢献活動では、「エンパワーメント」というアプローチのほか、「経済・社会・環境」という３つの基本要素を考慮することが求められる。いくら社会的意義があったとしても、経済効果を全く無視した活動では持続することができない。活動を通して収益や雇用を生み出す工夫が評価される。また、地域のニーズに的確に応えているか、地球環境への負担軽減につながっているかということも、地域貢献活動の質を評価する際の重要な視点として掲げられている。

３-３　2012年度Enactusワールドカップの概要

2012年度のEnactus world cupは、2012年9月30日～10月2日、ワシントンDCのWalter E. Washington Convention Centerで開催された。38カ国の参加大学が、それぞれの地域で進めてきたプロジェクトについて発表した。

この大会の大きな特徴は、さまざまな国の学生が対等な立場で競えることである。先進国の大学が高度な技術を駆使して課題解決に挑んだからといって、高い評価を受けるわけではない。むしろ、対象としている地域の課題を丁寧に掘り起こしているか、他者が諦めているような問題にもクリエイティブな思考で解決の可能性を見出しているかが重要な評価のポイントとなる。

また、先に述べた通り、教育的意義を高めていくためにも、FAの役割が重視されている。ワールドカップでは、FAのためのワークショップも開催され、さまざまな国の指導者たちが、より質の高い地域貢献や教育を果たしていくための意見交換を行っている。それぞれの国によって、社会的課題や大学の役割は異なるが、協働のネットワークを拡大していくための工夫、資金調達の工夫など共有可能なテーマについて、国毎の現状を報告するとともに、異国間のコラボレーションの可能性を探る。

地域貢献活動のプレゼンテーションコンペは、以下の形式に従って進められる[9]。

１）セットアップ（7分）
２）プレゼンテーション（24分）
３）質疑応答（5分）

参加大学は予選リーグ、準決勝リーグ、決勝リーグと勝ち進んでいく。各リーグにおいて、審査員は１位と２位の活動を選び、１位の評価の獲得数によって順位が決まる。2012年度は、エジプト、ジンバブエ、アメリカ合衆国、インドの４カ国が決勝リーグに進み、アメリカ合衆国を代表したBelmont Universityが優勝した。

Belmont University では、15 の地域貢献プロジェクトが進行しており、ワールドカップのプレゼンテーションでは、その内の４つを紹介していた。この大学の地域貢献活動の特徴は、商品価値が低かった（或いはほとんどなかった）ものに付加価値を与え、ビジネスへと発展させ、雇用を生み出しているということである。その過程で、経営に必要なマネジメントスキルを学ぶ機会を提供し、職に就くことが困難な人びとの起業につなげている。ジョブトレーニング事業のほか、グアテマラの孤児院で育った女性が参加しているアクセサリービジネス、エチオピアの女性が風俗業から抜け出すためのファッションビジネス、アメリカの出獄者の雇用を可能にしたマットレスリサイクル事業などを展開している。安定した仕事に就くことが難しかった人びとの雇用の機会を創出するだけでなく、在庫管理、販売管理のスキルを伝えることで、彼らの自立的な経営をサポートしている。活動を通して学生たちは、ジョブトレーニングのスキル、付加価値を創造する力、サステナブルなビジネス展開の構想力などを鍛えていく。

Belmont Universityの活動は、Enactusがトリプルボトムラインとする「経済・社会・環境」という３つの要素を考慮しているだけでなく、課題をもつ人びとのエンパワーメントを図り、持続的なビジネスへとつなげていることから、最も高い評価を得た。

４．EHCによるEnactusチャレンジ教育

本章では、兵庫県立大学環境人間学部が進めてきた地域貢献活動の概要を示すとともに、2012年から参加しているEnactusの取り組みが、どのような教育効果をもつかについて、参加した学生へのインタビューをもとに考察する。

４-１　EHC学生プロジェクトの概要

兵庫県立大学環境人間学部では、2011年3月にEHCを設立し、学際的な学部の特徴を生かした地域貢献プロジェクトを展開している。2013年8月時点で、学生が主体

的に進めている 16 件のプロジェクトがあり、206 名の学生が参加している。この数字は、全学生の 25%に相当する。

学生プロジェクトの活動では、単位の認定を行っていない。ただし、本学部で提供している講義との関連づけは重要である。講義のなかには、地域連携活動の発展やリーダー育成へとつながるようにデザインされているものがある。例えば、プロジェクトマネジメント論、環境教育論 A・B、フィールドワーク、基礎ゼミナール b、特別フィールドワークなどの講義を活用して、学生たちと地域の人びととのつながりを深めるとともに、地域課題とその解決方法を現場で学ぶ機会を増やしている。こうした講義は、チームビルディングや地域連携に必要なスキルの習得、並びに学生プロジェクトの質的向上につながっている。

さらに、多くの学生プロジェクトが立ち上がった 2011 年度は、EHC 兼務教員がマンスリーワークショップを開催し、目的の明確化やプロジェクトマネジメントのスキルを高めるためのサポートを行った。異なるプロジェクトに取り組む学生同士の交流を深めて、お互いのアドバイスをし合う学生コミュニティーを形成することで、活動の質的向上につながるのではないかと考えたからである。このような交流への関心は、学生たちの中にも徐々に高まっていった。リーダーとしてプロジェクトの推進に尽力してきた一部の学生たちが、エコ・ヒューマン・ブリッジ（以下「EH ブリッジ」とする）という学生グループをつなげるための新たな組織を立ち上げ、自分たちでレベルアップの機会を作り出していった。

ただし、学内での活動共有だけでは限界があることから、2012 年度から Enactus（当時の名称は SIFE）に参加し、学外での活動発表や他大学との交流を通して学生プロジェクトの質的向上につなげていくことを目指した。Enactus は、前章で述べた通り、活動の社会的意義、環境的意義を考えることの重要性を強調していることから、環境人間学部の方針とも親和性が高い。しかしながら、「アントレプレナーシップ」という観点から活動を発展させていくことは、EHC の学生団体にとって新たな試みであった。活動がボランティアで終わることのないように、経済的循環も踏まえて地域貢献のアプローチを考えだすことを目標の一つとした。

EHC の特徴は、活動の多彩性にある。さまざまな観点からのプロジェクトがあるからこそ、複雑な地域課題に応えるための新しい手がかりが見えてくる。そこで、EH ブリッジが中心となって Enactus のプレゼンテーションを行い、学生による多彩な地域貢献活動をつないで地域の課題に取り組むことの意義を伝えていくこととした。

兵庫県立大学環境人間学部は、Enactus に初めて参加した 2012 年度に国内大会第 3 位、2013 年度には準優勝の評価を獲得することができた。キャンパスがある姫路エリアで地域に根づいた活動を展開していること、また多彩なテーマをつなげながら新たなアクションを生み出そうとしていることが、高い評価につながった。学際的な学部の特色を生かしたことが、EH ブリッジの個性として現れている。では、Enactus の参加に向けて FA がどのようなサポートをしたか、また 2012 年度及び 2013 年度は具体的にどのようなプレゼンテーションを行ったのかについて、次節で示す。

4－2　Enactus チャレンジ

1）FA の役割と支援体制

著者らは、FA として、Enactus チャレンジの推進を図るとともに、EH ブリッジの活動を支援してきた。それぞれの担った主な役割は、以下の通りである。

内平隆之（EHC 専任教員）：複数の学生プロジェクト間の交流推進と、地域連携体制（ネットワーキング、資金調達、広報など）の強化

豊田光世（EHC 兼務教員）：環境教育・主体形成という観点からの助言と Enactus の理念及び評価基準の解説

井関崇博・中嶌一憲（EHC 兼務教員）：専門的知見を生かした助言とプレゼンテーションの分かりやすさ、訴求性向上のためのサポート

FA は綿密な連携を図ることで、学生たちが直面している課題を共有し、必要に応じた助言やメンタルサポートを行った。学生たちが自分たちの視点で活動の意義や発展の可能性を考えることを尊重しつつも、彼らとの対話の場を頻繁に設け、信頼関係の構築、思いの可視化、活動内容の深化などに務めた。

2）2012 年度の Enactus チャレンジ

2012 年度の Enactus 国内大会参加をきっかけに、EH ブリッジの学生たちは、改めて自分たちの活動の意義を問い直す機会を得た。なぜ地域貢献活動に参加しているのか、自分は地域にどのように貢献しているのか、またその経験から一体何を学んでいるのだろうかということについて、自分なりの答えを模索するようになった。EHC が設立される前、「大学在学中に何か意義のあることをしたい」とフラストレーションを抱えていた学生たちが、EHC の開設をきっかけにさまざまなプロジェクトで活躍するようになっていった。しかしながら、プロジェクトが始まると、目の前のタスクに追われ、自分たちの活動

の意味を改めて考える時間を十分にもてずにいた。EH ブリッジの活動も、「異なるプロジェクトの学生が交わった方が、よい活動ができるのではないか」との直感的思いからスタートしたため、日常的に行ってきた活動に対して「なぜ？」と問うことは、学生たちにとって容易なことではなかった。

FA と何度も議論を重ねた末、学生たちが辿り着いたのは、「学びのモチベーションの変化」への気づきであった。キャンパスの外でさまざまな職業の人たちと接するなかで、自分たちのコミュニケーション力、提案力、創造力などの限界を感じたという。大学の講義からも出来るだけ多くのことを吸収したいという気持ちが自然と高まり、キャンパスライフが豊かな意味をもつようになったと EH ブリッジのリーダーを務めた学生は語った。

2012 年度のプレゼンテーションでは、「ツリーハウスづくりを通した里山での環境教育」「古民家カフェによる地域づくり」という 2 つのプロジェクトを紹介しながら、学生と地域の双方に生じている変化について伝えた（図２）。地域との連携活動を通して、自分たちが社会にはたらきかける力をもっていることを知るとともに、課題解決のアイディアを生み出す力の限界についても認識するようになった。そのことによって大学で学ぶことの意義を自覚することができたこと、大学生活がより充実したものとなったことを、プレゼンテーションのなかで訴えた。

学生が自分たちの活動発表をまとめていく過程を見て FA が認識したことは、「課題分析力」「活動成果の分析力（定量・定性）」「伝える力」を高めていく必要性である。地域貢献で最も基本となるステップは、地域にどのような課題があるかについて日常の活動を通して常に考え続け、その課題に応えるための手がかりを模索することである。この基本的なステップを踏まえなければ、地域貢献は独りよがりに陥る危険性がある。

図２：2012 年度国内大会の様子

このような問題認識から、学生団体同士の交流の場を活用して、地域課題を深く掘り下げながら活動の意義を考察する機会を積極的に作っていくべきだと考えた。また、情報共有の場を積み重ね、自分たちの活動を分かりやすいストーリーで伝える力を高めていくこと、さらに、EHC の特色を生かした EH ブリッジの活動を活性化して、多様な活動をつなぎながら地域課題の新たな解決策を生み出していくことが重要であると認識した。

２）2013 年度の Enactus チャレンジ

2013 年度は、地域課題の認識を深めるために、EH ブリッジの学生たちが姫路エリアの地域づくりのキーパーソンと対話をする場を設けた。合宿形式のセミナーに、地域づくりや農業などの分野で活躍している方を講師として招き、意見交換を行った。学生たちは、さまざまな活動を立ち上げている地域リーダーの話と、自分たちの日常の活動との間につながりを見出すことに苦心していたが、セミナーを通して「在来種保存」というテーマに強い関心をもつようになった。播磨は、在来種保存に積極的に取り組んでいる地域であるが、その取り組みが地域住民に十分に認知されているとは言い難い。兵庫県立大学環境人間学部には、地域の方の参加による在来種農園があるため、学生にとって身近に感じやすいテーマでもある。そこで、「在来種保存」というテーマを主軸として、農、教育、食品開発などのプロジェクトをつなぎ、播磨の在来種保存に貢献する活動を進めてみることとした。

在来種とはどのようなものなのか。在来種を保存することには一体どのような意味があるのか。在来種の保存を地域活性化に生かすことはできるのか。EH ブリッジの学生たちは、こうした問いを考えながら、新たな活動展開を模索していった。姫路環境人間キャンパスで地域の人と在来種の栽培を続けてきた「畑っこ」、在来種で商品開発を行ってきた経験のある「DEN」、里山ツリーハウスの「木の子」という学生団体の他、水上地区で子どもたちが楽しめるまちづくりを行う「水上夢倶楽部」、食育に取り組む近隣の保育園などとつながりながら、在来種を「育てる・味わう・伝える」ための活動を進めた。

在来種保存というテーマは、ローカルな活動展開が極めて重要である一方で、グローバルな規模で関心が高まっている問題でもある。地域色を生かしつつも、国内外の他地域との対話が発展する可能性を含んでいる。農業、教育、環境、地域活性化など、さまざまな観点から深めていくことのできるテーマであるため、EHC の地域連携活動を発展させていくうえで大きな可能性をもつ。Enactus 国内大会においても、複数の審査員から、在来

種保存に向けた多彩な活動に対して、共感を得ることができた。EHC 学生プロジェクトをブリッジングする主軸テーマの一つとして在来種保存を展開していくことが重要だとの認識を得た。

4-3　EHC-Enactus チャレンジの教育的効果

本節では、EHC-Enactus チャレンジに参加した学生 4 名に対する聞き取りをもとに、この取り組みの教育的効果について考察する。2012 年度及び 2013 年度参加者から各 2 名が、聞き取りに協力した。FA が学生たちに問いを投げかけながら、インフォーマルな対話形式で意見を引き出した。聞き取り調査実施した 2013 年 9 月時点で、2012 年度参加者の 2 名は、すでに本学を卒業しており、卒業後のキャリア形成という観点からの意見も聞くことができた。

対話を通して得られた学生たちの発言の概要を、以下 5 つの項目に沿って整理する。

1）課題の分析と理解

・ 自分たちは「ただ活動していただけ」ということが明確となり、その後の活動を見直すいい機会となった。
・ Enactus のためのプレゼンを準備している過程で、今まで行ってきた活動の意味が自分でもよく分からないことがあった。同時に、それほど大きな意味がないと思っていた活動に意外と意味があることも分かった。
・ 在来種保存が地域社会では大切なテーマだと理解していても、知識の不足によって、どのように自分たちの活動とつなげることができるのか分からないことがある。

2）伝える力・コミュニケーション力

・ 活動を伝えようとすることで、自分たちの行ってきたことの意義を理解することができ、活動の内容にも自信が持てるようになった。
・ 大勢の観衆の前でプレゼンする機会はなかなかない。もっと Enactus のような機会が増えるとよい。
・ プレゼンテーションに関しては、評価基準に合わせて構成を作る経験が出来てよかったように思う。この経験を通して、相手の立場や状況を考えながら話そうという考え方が強くなったように思う。
・ 自分の考えを相手に伝えないとレスポンスは得られない。まずは伝えようとすることが大切だと感じた。
・ Enactus でのプレゼンテーションの機会を得たことで、就職後、人前で冷静に話ができている。講習会などで進行役を務めた時に高い評価をいただけることもある。

3）チームマネジメント

・ メンバーの間に温度差があることがある。全員のモチベーションを高めていくことの難しさを実感した。
・ FA からのアドバイスを理解したと思っても、他のメンバーにその内容を的確に伝え、共有することが難しかった。
・ 何をすべきかを判断し、役割分担や協働を進めていく力をつけなければならないと感じた。
・ 長期的な活動を行う際、成果をコンスタントに実感できるわけではない。目的が明確な部活や、労働の対価が分かりやすいアルバイトなど、短期的に成果が得られる活動に魅力を感じる学生が多い。

4）キャリア教育

・ 地域活動を行うなかで、将来やりたいことが見えてきた。就職する前の学生が経験する意味がある。
・ 地域貢献活動を行う中で、自分がどのように生きていきたいか、どのような事に価値観をもっているのかを考える機会を得た。地域貢献活動をしてなかったら、今の職場では働いていなかったように思う。

5）その他

・ 学部内の交流だけでは情報が限られてしまう。他大学との交流は視野を広げるうえで不可欠である。
・ 他大学との交流で、活動に対する想いや、チームマネジメントの方法を聞けたことが、当時の自分にとっては意味があった。
・ さまざまな課題を並行して進めていくマルチタスクの力を高めていく必要性を感じた。
・ アントレプレナーシップを意識し、経済効果を生み出す工夫を始めたことで、自分たちの活動に対する責任感が増していった。
・ 2013 年度の合宿セミナーで、それまで話したことのなかった地域の人の活動や思いを直接聞く機会があったのが刺激になった。もっとこのような機会が増えるとよい。

5．考察

EHC-Enactus チャレンジに参加した学生は、「課題分析力」「コミュニケーション力」「チームマネジメント力」など、地域貢献プロジェクトを進めていく上で必要な力を高めていくことの重要性を強く自覚するようになった。このような認識は、地域貢献活動を学生の主体的な学びへとつなげるうえで非常に大きな意味をもつ。

地域貢献活動の質を高めていくためには、課題の分析を丁寧に行い、地域課題とその背後にある大きな社会問題とのつながりにおいて、活動の意義を見いだしていく

力が不可欠である。また学生の柔軟な発想力を生かして、新しい視点から課題解決を考えていく力が必要である。こうした力を高めていくために、EHC では、兼務教員らがマンスリーワークショップを定期的に開催し、学生のスキルアップの場を提供してきた。ただし、スキルを習得するモチベーションが欠けているままでは、十分な教育的効果を生み出すことができない。Enactus という経験は、学生の学びのモチベーションを高め、自ら新たな学びを展開することにつながっているという点において、重要な教育的効果をもつと言える。

Enactus が学生の自立的学びを導くきっかけとなっている理由として、他大学との交流を通して同世代からの学び合いを生み出している点にある。「アントレプレナーシップ」並びに「経済・社会・環境」というトリプルボトムラインは、Enactus に参加するものとして追究すべき基本的な価値として示されているが、これらの基準も学生たちが互いに学び合う環境が構築されなければ、活動の質を高める道標としての機能を十分に発揮できないだろう。審査員による評価だけではなく、地域貢献という目的に向かって活動に取り組む同志からの学びがあるからこそ、大学生としてのアントレプレナーシップの探究につながる。Enactus が、国内大会やワールドカップというコンペの場に加え、国内外の大学間のさまざまな交流を生み出すことができれば、学びの可能性がさらに広がるのではないかと考える。

謝辞

EH ブリッジの学生の協力により、本報告をまとめることができました。率直な意見を聞かせていただいた在校生、OB、OG の皆さんに心よりお礼を申し上げます。

注

[1] 図１は、中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」並びに文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」資料をもとに著者が作成した。
中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm, 2013 年 11 月 15 日）
文部科学省「地（知）の拠点整備事業説明会資料」（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2013/04/16/1332607_01_2.pdf, 2013 年 11 月 15 日）

[2] Lawrence L. Martin, Hayden Smith and Wende Phillips, "Bridging 'Town & Gown' Through Innovative University-Community Partinerships," *The Innovation Journal: The Public Sector Innovation Journal*, Vol. 10, No.2 (2005): 1-14.

[3] Peter Levin, "Collective Action, Civic Engagement, and the Knowledge Commons," in Charlotte Hess and Elinor Ostrom ed., *Understanding Knowledge as a Commons: From Theory to Practice* (Cambridge, MA: The MIT Press, 2007), p. 260.

[4] Martin et al.

[5] 経済産業省「社会人基礎力」（http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/about.htm, 2013 年 9 月 22 日）

[6] Enactus は 1975 年にアメリカの大学生が始めた SIFE (Students in Free Enterprise) という組織がもとになっている。2012 年に Enactus と改名し、実践力の重要性を前面に押し出している。

[7] 小門裕幸『アントレプレナーシップとシチズンシップ』法政大学出版局（2012), p.26.

[8] *Enactus Team Handbook*, 2013. (Unpublished manuscript.)

[9] 2013 年度より、プレゼンテーションの形式は、セットアップ（3 分）、プレゼンテーション（17 分）、質疑応答（5 分）に変更された。

（平成 25 年 9 月 30 日受付）